植民地統治と地方社会
——日治時期台湾史料と研究潮流の紹介 *

張　隆志

はじめに

日本統治時期の台湾史（1895 ～ 1945 年）研究は、1980 年代後期に大きな発展を遂げ、清朝台湾開発史に代わり学界の関心が最も集中する新分野になった。その主要な特徴として、以下の 3 点が挙げられよう[1]。

第一は、台湾中心史観の提唱および植民地近代性に対する反省。戒厳令解除以後、台湾近代史研究では台湾中心史観が盛り上がりを見せた。これは、台湾の土地と人民こそが台湾の歴史の主体であることを強調し、政権や統治者を中心に据えていたそれまでの史観をくつがえすものだった。また長期的かつ全般的な視点から、台湾社会の発展と変遷の過程を理解すべきだとも主張している。

第二に、新史料の発掘整理と史料学の発展、および各種公文書や民間文書のデジタルデータベース化。日治時期の台湾史研究は 1990 年代以降、清朝時代の台湾史と入れ替わり、勢いのある新分野となった。その要因の一つとして、『台湾総督府公文類纂』といった公文書の公開のほか、『台湾日日新報』などのデータベースが整えられ、また各種民間史料が整理されたことがある。ここでは中央研究院台湾史研究所を例に、日治時期の公文書アーカイブ・民間文書・家族史料・個人の日記・地図・写真およびデジタルデータベース化といった近年の史料整理の成果を紹介する。

第三は、問題意識と研究視座の新たな創造、および学際的新分野の登場。台湾近代史研究が発展したもう一つの原動力は、問題意識と研究視座の新たな創造にある。新世代の研究者は史料実証の基礎の上に、ポストコロニアリズム・近代性・フェミニズムおよびグローバル化、トランスナショナルといった異なる思潮を結合していき、それまでの抗日民族主義やモダニズム理論といった古いモデルから離脱しようとした。そして植民地の政治・経済・社会・文化史の研究の他に、新しい課題や見解を提示し、法律史・医学史・女性史・環境史といった学際的な新領域を開拓していった。

本稿ではまず、中央研究院台湾史研究所档案館を例にとり、日治時期台湾史料の整理概

＊　本稿は、2011 年 7 月 14 日国際学術シンポジウム「植民地帝国日本における支配と地域社会」で発表した内容をもとに書かれたものである。松田利彦准教授に発表の機会をいただいたこと、陳妍湲博士に日本語原稿作成のサポートをしていただいたこと、春山明哲教授に貴重なアドバイスをいただいたことに対し、この場を借りて感謝の念を記したい。本稿中の議論・意見は、すべて筆者の責任のもとに書かれたことも明記しておく。

1　張隆志「當代台灣史學史論綱」『台灣史研究』第 16 巻第 4 期、2009 年、161 ～ 184 頁。